

『論理学』（1874）におけるロツツェの概念論

浅野将秀（Masahide ASANO）

首都大学東京大学院人文科学研究科

ヘルマン・ロツツェの『論理学』（1874）は19世紀後半から20世紀前半にかけての論理哲学においてもっとも広く読まれた著作の一つであり、哲学史における重要性は疑いない。ロツツェ研究は、1980年代にフレーゲ哲学の歴史的背景をめぐってスルーガとダメットの間でなされた（あまり評判のよくない）論争以降、しばらくの間影を潜めていたが、近年になってロツツェの生涯や哲学を広範に扱う研究が相次いで公刊されている。その中でも興味深いのは『論理学』の概念論をめぐる研究である。伝統的な概念モデルの批判を通じて与えられる、概念の形成や構造に関するロツツェの一連の考察は、とりわけ『実体概念と関数概念』のカッシーラーに大きな影響を与えたとされるが、有名な「妥当」に関する学説を中心とする価値哲学の創始者としての側面と比べるとあまり目を向けられてこなかった観がある。しかしその所説を詳しく見ると、たんなる歴史的興味にとどまらない重要な洞察を認めることができる。本提題では、おおよそ以上のような観点から、近年の研究動向の紹介を交えつつ、ロツツェ哲学の再評価を試みることにしたい。